

公衆衛生

「十五年戦争」と公衆衛生(その2) 蒔 昭二(金沢市内科)

結核と栄養

*日本は先進国で最高の「結核」罹患率

「結核」は、かつては日本人の最も恐れる「死神」であった。昭和の初期、「富国強兵」を国是とした国が、一九四一年に官立金沢医科大学に「結核研究所」を併設したのもそのためであった。しかし、今では抗結核薬剤の開発で、約半年の治療で「完治する病」となった。表1⁽¹⁾はそれを示している。

しかし、罹患率で見ると、今でも日本は、「先進国」では最高である(表2)⁽²⁾。日本は、依然として「結核国」なのである。これを都道府県別の罹病率⁽³⁾(人口10万対一八・二)で見ると、大阪市(四七・四)名古屋(三一・五)堺市(二八・五)東京都(二六・〇)の順となっている。このように大都市で発病が目立つのは、「検診が受けられなかったり、保険がなくて受診が遅れたり」と、社会的弱者が多い⁽⁴⁾からと言われている。

*日本の「結核」による最高死亡率は終戦前後

ここで、日本が「近代化」してからの結核死亡率の年次推移をみると、図1⁽⁴⁾のごとくである。一九二〇年ごろに死亡率のピークがあるが、これは当時流行した「スペイン風邪」(インフルエンザA)の影響である。そして前回の学童の身長体重のグラフと同様に、一九四三年から一九四七年前後で、このグラフも途切れている。この原因は、子どもたちの「身長・体重」の「軍事機密」とは違い、敗戦前後の混乱で各都道府県から死亡率などの「衛生統計値」が政府に届けられなかったからである。集計

されれば、どんな数字となったのであろうか？

ところが、その数字を予測できるデータ⁽⁵⁾があった。それによると終戦前後の一九四四年〜一九四六年が二八・二〇という数字である。この数字が正しいとすれば、この時期が日本の結核死亡統計上での最高死亡率であり、「世界一」と言えそうである。

*戦争末期、結核療養所の入所者の半数以上が死亡

当時の結核の治療方針は、結核療養所での「大気、安静、栄養」であった。ところが、ある結核療養所の「年度末入院患者総数」に対する「年間累積死亡者数」の比率をみると、一九四一年八・六%、一九四二年一七・四%、一九四三年一〇・三%、一九四四年二八・一%、一九四五年六六・九%となっている。ここは「戦場」

でもないのに、戦争が進むに従って死亡者が増加し、終戦の年は入院患者の半分以上が死んでいったのである。

「私は時々脱糞して岡山市の市街に一杯二十五銭の雑炊を食べにいった。・・・そのころ、霊安室のお供えの盛り飯がなくなることがたびたびであった。・・・」。これは有名な「生活保護裁判」といわれる「朝日訴訟」の原告朝日茂氏の手記の一節である。国立療養所史(結核編)によれば、給食は一九四二年ごろは一人二千四百キロカロリーであったが、だんだん減り、一九四四年は千三百キロカロリーの一杯のお粥、すいとん、それにたくわん一切れと塩昆布が、毎日の献立であったと記載されている。入院患者の六六・九%という世界一の死亡率は、まさに栄養不足が要因であったのであろう。

*精神病患者も餓死

十五年戦争時、政府は青年の徴兵検査での「甲種合格」率の年々の低下から、結核対策を重視し、一九三七年に「保健所」を設置。「結核予防法」も改正し、翌年「厚生省」を設置するなど対策を推し進めたが、二合一勺の「配給米」、それも欠配、欠配では国民の結核対策や「富国強兵」とはならなかったのである。このような栄養不足からくる死亡率の急増は、精神病患者やハンセン病療養所でも同様であったようである。東京都立松沢病院(精神科)の記録を見ると、ここでも戦争が進むにつれ

て、死亡率が急上昇している。なんと一九四五年は四〇・九%、二人に一人が死んだのである。「・・・金玉がはれちゃうのです。患者はかくしてもガニ股で歩くんですが、・・・そのうちにトリメ・・・やがて体にむくみがきました・・・」。精神病患者も餓死させられたのである。

*新しい課題

表2のように、日本は依然として先進国の中では結核罹患率がトップであるが、これを罹患年齢で見るとピークは七十五歳以上である。戦前一九四〇年ごろでは十五〜二十九歳がピークであったが、逆転である⁽⁷⁾。また、都道府県別結核罹患率で見ると、全国平均値(一八・二)を越すのは、四つの大都市圏と岐阜、和歌山、島根、愛媛、佐賀、長崎、大分、鹿児島、沖縄の各県であり、過密都市と過疎地域である⁽⁴⁾(石川一六・四)。

- 最近、城北病院に救急車で担ぎ込まれるホームレスの方々の中に、時に治療されて
- (1)公益財団法人結核予防会編・発行「結核の統計2011」、25頁、2011.9.
 - (2) Global Tuberculosis Control WHO Report 2009.
 - (3)公益財団法人結核予防会編・発行「結核の統計2011」、4頁、2011.9.
 - (4)公益財団法人結核予防会編・発行「結核の統計2011」、1頁、2011.9.
 - (5)楠信男「本邦結核の趨勢について」福島医学雑誌、2巻5―2号、211頁.
 - (6)国立療養所史研究会編「国立療養所史」、29〜30頁、厚生省医務局.
 - (7)公益財団法人結核予防会編・発行「結核の統計2011」、11頁、2011.9.

表1 結核死亡率の年次推移

年 度	死 亡 率 (人口10万対)
1900	163.7
1918	257.1
1930	185.6
1943	235.3
1960	34.2
1970	15.4
1980	5.5
1990	3.0
2000	2.1
2010	1.7

表2 各国の結核罹患率 (2007年)

国 名	罹 患 率 (人口10万人当たりの新患者発生率)
ア メ リ カ	4.3
カ ナ ダ	4.7
ス ウ ェー デ ン	5.4
オーストラリア	5.5
オ ラ ン ダ	5.8
ド イ ツ	6.1
デンマーク	7.2
イ タ リ ア	7.7
フ ラ ン ス	9.1
イ ギ リ ス	13.9
日 本	19.8

図1 結核死亡率の年次推移 — 各国の比較

